**古典学習陶冶会会員のための経済・経営講座　第13回　「心ひとつの置き所」**

**古典学習陶冶会会長補佐　志水達也税理士事務所所長　志水達也**

名経営者達は皆、「思うこと＝心」の大切さを教えています。大谷翔平選手が座右の書としている中村天風も「思うこと」の大切さを書き残した一人です。天風は、日本にヨガを広めた人として有名ですが、「心で思うこと」を積極的にすれば人生が好転すると多くの経営者達に教え諭しました。では、どのように心を積極的に保つのでしょうか。天風は、「観念要素の更改」といって、寝る前に、鏡に向かって「おまえは信念が強くなる」と命令し、目覚めた直後に、「私は、きょう信念が強くなった」と声に出して言えというのです。これによって、恐れや、迷いで満たされた消極的な心が、積極的な心に更改され、人生が好転するのです（１）。私の友人がガンになった際この話をしたことがあります。彼は鏡に「今日一日強く生きる」と貼り、毎朝口に出して読み、医者の余命宣告の４倍近く長く自宅で生きることができました。つまり、実証済みで、効果テキメンですので試してみてください。

天風はこのことをヨガの修行で体得したそうですが、仏教では、過去、現在、未来と世代を超えて続いて行く意識を阿頼耶識（アラヤ識）というそうです。もちろん、一人の人間の過去・現在・未来もアラヤ識でつながっています。ちなみに、ヒマラヤはヒム（雪）とアラヤ（蔵）が合わさった古代インド語で、アラヤ識は蔵のように色々な意識を納める場所、つまり、深層意識とか潜在意識のことです。

私たちは様々な場面に遭遇します。その事実を私たちは様々に解釈します。天国のような事実、地獄のような事実、それを天国のように、地獄のように解釈する。更に天国のような事実を地獄のように、地獄のような事実を天国のように解釈したり・・。つまり、心は、一つの事実を一つの解釈でと執着することなく、無数の解釈が、瞬時に時々刻々と生まれる構造なのです。これらの思いは、泡のように消えるのですが、「種」としてアラヤ識に堆積します。この堆積物がその人に見える「世界」を決定し、消極的なことばかり考える人には、世界が暗く消極的に見えることでしょう。そして、その見え方が、原因となり、縁となり、結果として消極的なことが起きると仏教は教えています。

心とはそのようにできていますから、どんなに苦しい状況でも、楽しいと解釈することもできるのです。安岡先生は、これを「苦中楽有り（２）」といい、「心中常に喜神を含む」こと、これこそが人生の極意であると述べています。さらに、明治の政治家山岡鉄舟は次の名言を残しました。

人生は心一つの置き所。 晴れてよし、曇りてよし富士の山。もとの姿は変わらざりけり。

つまり、富士山は、晴れた日には美しく、曇った日には残念だけれど、心の置き方ひとつで、どんな日でも、「よく」みえるというものです。つまり、晴れた、曇ったといって、一喜一憂せず、富士山のようなどしりとした心をもてという意味に通じます。

以上のように見てくると、釈迦、山岡鉄舟、天風先生、安岡先生、皆同様なことを教えていることに、気づかれるでしょう。つまり、心を、変幻自在に、執着せず、積極的で、どしりとした状態に保てということです。経営講座に仏教の話を持ち出すと非科学的に聞こえますが、人工知能の父といわれるアメリカのミンスキー教授は「人工知能をやろうとすれば、・・人間の心の仕組みが標的になり・・心の研究には仏典が比類なきテキストになる」（３）と述べています。

２５００年も前の仏教の智慧が明治、昭和の古典に引き継がれ、現在の最先端の研究の役に立っているのです。古典おそるべしですね。

（注１）これは「命令暗示法」、「断定暗示法」とも呼ばれる。

（注２）安岡正篤先生の座右の銘で六中観という。苦中楽有、忙中閑有、死中活有、壺中天有、意中人有、腹中書有

（注３）田原総一朗、『生命戦争　脳・老化・バイオ文明』、文春文庫